

『古事記』

別天神五柱～神世七代

天地初發之時、於高天原成神名、天之御中主神訓高下天、云阿麻。下效此、次高御産巢日神、次神産巢日神。此三柱神者、並獨神成坐而、隱身也。

天地初めて發けし時、高天原に成りし神の名は、天之御中主神、次に高御産巢日神、次に神産巢日神、この三柱の神は、みな獨神と成りまして、身を隠したまひき。

『國體原理』今泉定助著 立命館出版部 昭和 10 年



第五章 生成化育論

第一節 万有同根の原理

日本の古代思想に於いては、人間は勿論、山川草木を悉く神に歸し、動物界、植物界、鉱物界の一切の存在、有機界、無機界の一切の状態、物質界、精神界の一切の活動を悉く神と称したのである。

例へば、山の神は大山津見神（おほやまつみのかみ）、野の神は鹿屋野比売神（かやぬひめのかみ）、風の神は志那都比古神（しなつひこのかみ）、木の神は久々能智神（くくのちのかみ）、海の神は大綿津見神（おほわたつみのかみ）、水戸（みかと）の神は速秋津日子神（はやあきつひこのかみ）、速秋津比売神（はやあきつひめのかみ）、邪悪の神は八十禍津日神（やそまがつびのかみ）、大禍津日神（おおまがつびのかみ）、正善の神は神直毘神（かむなほひのかみ）、大直毘神（おほなほひのかみ）、等々。

以上の例によっても、古代日本人が宇宙万有を、生物と無生物とを問はず、精神と物質との区別なく、善悪、美醜等の比較を超越して、悉く神と称へたことが判るのである。これが即ち八百万（やほよろづ）の神々であって、宇宙万有即八百万神である。然し、これ

だけならば単なる汎神論と異なる所がないように見えるのであるが、日本民族の万有観は、決して単なる汎神論ではない。それは根本と末梢、中心と分派との区別を厳存するのである。

宇宙万有即八百万神が、始めから集団として存在すると考へることは、世界の大多数の汎神教に共通な思想であるが、これが即ち個人主義及び民主主義の基礎をなす思想であつて、又明かに自然科学の真理に反するものである。日本の万有観は、決して斯かる無秩序な、乱雑なものではない。此の万有即ち八百万神は、産霊（むすび）によって成り出で、産霊神（むすびのかみ）から生れ出でたものである。それは本居宣長翁が「さて世間（よのなか）に有とあることは、此天地を始めて万の物心事業（こと）も、悉（ことごと）に皆此二柱（はしら）の産巢日大御神（むすびおほみかみ）の産霊（むすび）に資（よ）って成出るものなり。」（古事記伝）と説き、平田篤胤翁が、「産霊（むすび）大神（天地万物に本生霊明の大父母ありて、天上に坐（おはし）て、万有を主宰し給ふ御名を産霊（むすび）大神と申す）は、天地万有の真主なり。天を生じ、地を生じ、人を生じ、神を生じ、物を生じて其を主宰し、其を安養し、我人の本生の大父母にて、心身性命すべて此の大神の賦賜（ふし）物なり。」（本教外篇）と説いて居る。而して此の二柱の産霊神（むすびのかみ）即ち高皇産霊神（たかみむすびのかみ）と神皇産霊神（かみむすびのかみ）とは、天御中主神（あめのみなかぬしのかみ）より出でたのであつて、二神畢竟（ひっきょう）一神に歸し、宇宙万有は天御中主神（あめのみなかぬしのかみ）に歸一するのである。

此の歸一と云ふ意味は、ただ平面的に、集団に中心と分派との区別があると云ふだけではなく、立体的に、根本と末梢との段階があり、末梢は根本より成り出でたものであると云ふことを明かにしたのである。

宇宙万有は悉く天御中主神より出でたるものである。神より出でたるものは、又神である。故に宇宙万有は悉く神である。これ我が古代思想の根本観念であつて、古典に表れたる宇宙観、人生観の基礎をなすものである。更に詳言すれば、天御中主神の御稜威^{みいつ}によつ

て、宇宙万有が出来たのである。御稜威は、^{みいつ}霊出の義であって、^{みたま}霊は即ち天御中主神の御霊である。其の御霊が普く宇宙に分泌分派出する。其の分出する単一の分体が^{いくむすび}生魂である。生魂は生成発展の単位である。これが^{たるむすび}足魂、^{たまつめむすび}玉留魂に発展して、時間となり、空間となり、因果律となり、精神となり、物質となり、鉱物となり、植物となり、動物となり、宇宙万有となるのである。斯く根本中心より発顕したる末梢分派は、又根本中心に還元する。往くものは必ず還り、還るものは又必ず往く。往還出入窮りあることなく、此の発顕と還元とを、間断なく反復連続する間に、宇宙万有が生成発展するのである。これ即ち生成化育の態様であって、その詳細は後段に於いて述べる所である。

斯く宇宙万有は、同一の中心根本より出でたる分派末梢であって、中心根本と分派末梢とは、不断の発顕、還元により一体に帰するものである。之を宇宙万有同根一体の原理と云ふのである。

以上は古典上及び古人の学説上の例証に徴して、日本民族の宇宙観、万有観の根本原理を示したのであるが、之を以ても日本思想の世界無比、万国に卓絶せることが窺はれるのである。それは云ふ迄もなく、産霊の思想である。万有を静態に、平面的な配列に於いて見ずして、根本より末梢へ、不断の創造発展の動態に於いて、立一体的な過程に於いて把握する所に、その根本特質があるのである。これあるが為めに、万有同根の原理と、次に述べる中心分派の原理とが確立し、日本思想は何処まで行っても、対立主義や民主主義に墮することはないのである。

次に此の原理、此の思想が如何に宇宙の絶対真理であるか、近世科学の研究の結果を通観して、其の普遍性を証明することにしよう。

宇宙万有は、動物、植物、鉱物、有機物、無機物等の分類による物質と、感覚、感情、意志、理論、思想等の精神と、此等に共通な時間、空間、因果律等の形式とに、三大別することが出来る。先づ物質界に就いて、万有同根の原理が如何に証明せられて居るかを見よう。

一切の物質は、有機物たると無機物たるとを問はず、気態、液態、固態の何れの形態に在るかを論ぜず、悉く元素に還元せられると云ふことは、化学上の根本原理である。此の元素は水素、ヘリウム等の原子量の最も少いものから、ラヂウム、ウラニウム等の此の最も多いものに至るまで、現在世界に発見せられて居るものが、凡そ九十二種類ある。若し此の九十二の元素が根本から別々のものであるならば、宇宙は九十二の根元から出来て居ると云ふことになるのであるが、此等の元素を原子番号の順に列べると、その物理的、化学的性質は、アルカリ金属元素に始って、不活性元素で終るのを一つの周期とし、幾つかの周期を作る。これが元素の周期系であるが、之によって元素も亦進化するもので、根本的に別々なものではないと云ふことが判ったのである。然るに、今より四十年前頃から光のスペクトル、X線、放射能等に就いて、深遠微細なる研究が発達し、各方面の多くの実験の結果は、総べての元素の原子は陽に帯電した核と、その周囲を取り巻く、陰電子群より出来て居て、此の陽核及び電子群の組成の状態及び数量の多少によって、種々の元素を生ずるものであると云ふことが判明し、之によって元素の周期系が説明せられるようになった。

斯かる原子は如何なる構造を有するか、之に就いて精密なる新説を提唱し、実験の結果との驚くべき一致によって、世界の学界を驚歎せしめたのが、ボール（斎藤注ニールス・ボーアのこと）であった。今日では新量子論及び不確定の原理によって、ボールの学説も、原子模型としてより以上に価値なきものとなったが、しかも此の模型は原子に就いての根本的の考を与ふるものであった。それによれば、総べての原子は中心に陽核があつて、原子の質量の大部分を占め、その周囲を同じ陰電気を持つ多数の電子が廻転して居るものである。核と電子との距離は、核並に電子自身の大きさに比べて非常に大なるので、全体の形は太陽系とよく似て居る。電子の数は元素の種類によって異なり、原子番号が Z である原子は Z 個の電子が軌道を描いて、陽核の周囲を廻転して居るのである。元素の性質は既に述べた如く、アルカリ金属元素で始って、不活性元素で終るのを一つ周期とし、幾つかの周期があるから、原子内の電子は不活性元素のところを一区切りとして、幾つかの層に配

列され、各層は皆アルカリ金属元素から始って、不活性元素で完成して居ると説かれたのであった。

斯くの如く、一切の元素、換言すれば一切の物質は、唯電子の数とその配列とによって、性能を異にするだけで、物質の根源は、ただ陽核と電子との関係に帰着することになった。

原子模型に就いての考が進むと共に、原子核に就いての研究も従って進歩し、放射能物質の変脱、アルファ線による軽元素の人工破壊等の方法によって此の研究が進められたが、ラザーフォードは凡べての元素の原子核は、数個の陽粒子と、数個の陰電子との結合によって組成せられ、原子核の大きさの拡がりの処では、クーロンの法則は成立せず、同種の電気も相引き合ふと云ふことを提唱した。此の原子核に就いての研究は、今日も尚大部分未知の領域に残され、物理学者の研究の中心になって居るが、要するに、それは陽に帯電した電氣的エネルギーを表すものであると云ふことだけは確である。陰電子は云ふ迄もなく、陰に帯電した電氣的エネルギーを表すものである。従って物質粒子はエネルギーの塊として考へられ、物質の概念はエネルギーの概念に歸せられることになったのである。

茲に於いて、一切の物質が同根一体であると云ふことは、頗る明瞭である。同じエネルギーが質量となり、或は速度となって、宇宙万有を顕現する。而して質量と速度とが、相対的に変化すると云ふことは、電氣力学の論証する所である。之によって物質の觀念、旧式の唯物論等は、根底から覆されたのである。何となれば、それ等は質量不変の定則を基礎觀念となすものであって、物質と云ふ言葉自体が、質量を意味するものだからである。斯くて吾人は物質界を一貫する重大なる真理に直面した。即ち万有は本来同根一体であるが、その運動速度によって、有らゆる種類の差別相を顕現し、又平等相に還元すると云ふことである。例へば動物、植物、鉱物として論ぜらるる静態に於いては、物質の種類は幾万幾億なるやを知らず、文字通り千態万様である。それ等が化学変化の速度に至れば、前述の如く九十二種類の元素に還元される。更にそれ等が電子の速度に至れば、同根一体のエネルギーに還元されるのである。

此処に一つの木片がありとせよ。此は植物として植物分類学上の一つの名称を与へられ

るであらう。それと同時に、此は一つの有機化合物として、分子式或は構造式を与えられるであらう。それと同時に、これは電子及び陽核の運動の態様として、近時の量子力学を以て律せらるべきものである。第一、第二の場合は差別相である。第三の場合は平等相である。第一の場合は皮相の観察であり、第二の場合はやや深刻なる観察であり、第三の場合は最も深刻透徹なる観察である。而して宇宙万有同根一体の原理は、此の第三の観察に於いて、始めて了解されるのである。

次に精神界に就いて、万有同根の原理を説かねばならぬ。精神とは何ぞやと云ふ問題は、哲学上、科学上の興味の一中心をなすものであるが、未だ定まった学説なく、未解決の難問である。然しながら日本民族の靈魂観に於いては、その解決は決して難事ではない。一切の物質現象の根源が、又精神現象の根源なのである。これが為めに、宇宙万有同根一体であると云ふのである。之を科学的に云へば、同じ根本エネルギーが発顕して物質現象となり、又精神現象となるのである。現代科学の通説では、精神は脳神経細胞の活動であると称せられて居る。脳神経細胞その物が、精神でないことは明かで、その活動である。而して活動とは、化学変化の速度の運動を意味するのではない。脳神経細胞を構成する物質分子の本質たる電子運動の、波動力学的、量子力学的現象が精神の本質なのであらう。精神の速度が光の速度、或は電波の速度に類することは、何人も経験上承知する所である。これ精神現象が、前記の物質の態様の第一の段階、第二の段階に属せず、第三の段階に属するものなることの一つの証明である。

脳細胞は例へば巧妙なる発電機の如きものであって、絶大無限の速力を以て客観界を模写し、之を分析、総合し、生成発展せしめることが、感覚、感情、推理、思想等となって現れるのである。而してその発展の様子は、物質界の発展の様子と、全く同様である。これ精神と物質とが、同根一体なることの一つの証明である。

斯くの如く、物質と精神とは、同根一体であって、等しくエネルギーが発顕したるものである。唯エネルギー活動の速度及び態様によって、或は物質となり、或は精神となる。

宇宙の精神は光である、電気である。之を構成するものは光量子である、作用量子であるとも云へるであらう。その同じ光量子、作用量子の働きによって、人間の精神が出来るのである。故に人間の精神は、宇宙の精神と同根一体であることはいふまでもあるまい。

唯物論者等は、此の最高真理が解って居ないから、途方もない間違を云ふのである。彼等が物質と称するのは、エネルギーの第一階、第二階の態様で、速度が極めて緩慢で、質量の多い鈍重な状態を云ふのである。而して此の物質が根源で、精神はその上層現象であると云ふに至っては、全く本末転倒である。斯かる鈍重なる特殊状態、即ち物質と称せられるものの根源は、エネルギーの第三階の態様、即ち波動力学的、量子力学的現象である。これは物質と云ふよりも寧ろ精神である。精神が根本で、物質が末梢なのである。唯物論は此の根本的誤謬の為に、多くの錯倒を以て終るのである。

以上、精神と物質との同根一体を説いたのであるが、次に此等に共通な時間、空間、因果律等の形式に就いて、万有同根の原理を説くことにしよう。

時間及び空間が、絶対的のものであると云ふ考は、質量が絶対的のものであると云ふ考と共に、長らく人間の思想を支配した。否、現在に於いても多数の人々の思想を支配しつつある。例へば、尖端的な唯物思想の代表作たるエンゲルスの「反デューリング論」、レーニンの「唯物論と経験批判論」等の著作に於いても、三次元ユークリット空間と一次元の時間とを、絶対的なもの、原始的なものと信じて居る。然し少し深く立入って考へるならば、斯かる考が皮相的であると云ふことが、容易に了解されるのである。それには相対性原理の序論を紹介すれば十分であらう。

第一に考ふべきは、運動或は静止と云ふ観念が、全く相対的のものであると云ふことである。Aが静止し、Bが之に対し、或る速度で運動して居ると云ふ場合には、反対にBが静止し、Aが之に対し、或る速度で運動して居ると考へることが出来る。斯くの如き相対的運動以外に、絶対の静止、或は絶対の運動なるものは、只に認識し得ないのみならず、全く無意味なものである。而して此の理を推し進めると、或る坐標系がエーテルに対して

静止して居るか、又は等速運動をして居るかは、全く決定し得ないこととなる。或る観測者の坐標系に於いて、二つ事件を連ねる時間は、通常光によって認識されるのであるが、エーテルに対して、静止して居る坐標系に於けると、之に対して等速併進運動をして居る坐標系に於けるとで、光の進行状態が異なる筈である。従って前の坐標系に於けると、後の坐標系に於けるとで、時間の判断を異にし、長短の差を生ずることとなる。然るに両坐標系の何れが、エーテルに対して、静止して居るかを決定することは出来ないのであるから、前者に於いて用ふる時間と、後者に於いて用ふる時間とは、同等の権利を以て真の時間であると主張することが出来る。是は従来時間に関して、殆ど万人の抱いて居た観念、即ち真の時間に関する判断は、如何なる坐標系に於いても同一であると云ふことと矛盾することになる。是が時間の相対性であるが、空間に就いても同様のことが云ひ得るのであって、二事件の空間的距離は、一般に坐標系によって異り、空間的方向も亦坐標系によって異なるものである。而して、此等の関係を数式で示すのがローレンツの転換式である。

時間及び空間の相対性は、相対性理論の基礎をなすものであるが、従来は時間と空間とは、互に独立なものと考へられて居た。即ち一つ事件の空間的位置を空間坐標 X 、 Y 、 Z で与ふれば、 X 、 Y 、 Z の転換は時間 T に無関係であると考へられて居たのである。然るにローレンツ転換に於いては、 X 、 Y 、 Z の転換式は T をも含み、同様に T の転換式は X 、 Y 、 Z をも含む。即ち時間と空間とが関聯するのである。而して此の転換式は、此等四個の変数の一次式であるから、数学的には T と X 、 Y 、 Z との間に本質的の区別は存在しない。従って X 、 Y 、 Z 、 T の四次元を持つ空間を考へ、電子、物体、エネルギー等、空間内の位置を点で代表さすことが出来、且つ一般に運動するものの時間及び空間の位置を、此の四次元空間内の一点として表すことが出来る。これが所謂世界点であって、此等の物の運動は、此の空間内の線で表され、之を世界線と称して居る。此の四次元の時空が、現代物理学の与ふる世界像である。

さて此の世界像、宇宙の真の姿と看做される四次元の時空の本質は如何なるものであるかに就いて、近世物理学は、時空が物質と不離の関係にあるものであると説くのである。

一面より云へば、時空の計量的性質は、物質によって定められるのである。即ち時空は電子又は陽核の電磁場であって、旧式理論に於けるが如き等質、等向なものではなく、電子又は陽核と電磁場とは、互に独立に存在するものではないと云ふのである。電子又は陽核のエネルギーと、電磁場のエネルギーとは、全く区別することが出来ないものであるから、時空は電子又は陽核を中心とするエネルギーの拡張であると云ふことに帰着する。即ち、時空と物質とは同根一体である、と云ふことになるのである。

次に、因果律に就いて現代科学の解釈を求めねばならぬ。因果律が時間及び空間と共に、絶対的な独立なものであると云ふ考は、機械学的宇宙観及び唯物論の基礎をなすものであって、唯物論者は之を合法則性と称して、彼等の哲学の基礎にして居るのである。然し実験と理論との、両方面より発展した現代科学は、此の因果律にしかく絶対的な、独立な地位を与へないのである。

因果律は自然現象の普遍的決定性を意味するものであって、之を科学的に云ふならば、物理的量の変化に、微分方程式の存在することを意味するのである。一切の自然現象を微分方程式に還元することが、在来の物理学の方法であった。従って此の意味に於いて、因果律は先験的な絶対的な地歩を占めたのである。然るに之に対して革新的な抗議を齎した^{もたら}のが量子論である。

量子論は輻射及びそのスペクトルの研究から出発して、エネルギーが無限に細分し得るものではなくして、一定の素量があり、常にその整数倍として存在すること、物理学的量は、空間を通じて連続的に伝播するものではないと云ふこと、物理学的運動は連続的ではなく、其処には要素的な不連続性があり、量子飛躍があると云ふことを主張するものである。連続的でなく無限に細分し得ないと云ふことは、微分が不能であると云ふことに外ならぬのであるから、一切の現象を微分方程式に還元する方法、そのものに根本的な疑問が生ずるのである。

プランクが創唱した作用量子の考へ、アインシュタインが之を拡張した光悦子の考へは、

我が靈魂觀の基礎をなす靈子の考へに接近するものであって、此の靈子は生魂いくむすびと稱へられ、それ自身が単一不可分の微粒子で、生成発展の原素となるものである。宇宙万有は此の微粒子の発顕と還元、集合と分散との態様であると見るのが、我が靈魂觀の基礎原理であつて、科学は数千年間の実験と理論との努力を経て、漸く我が靈魂觀に接近する正常な宇宙万有觀に辿り着いたことを示すものである。

景子論は最近十年間に、新量子論として目覚ましい発展を見せた。ドブローリーは物質粒子に波動的性質を附して、之を物質波と稱し、此の物質波にエネルギーが配属して居ると考へたが、シュレーチンガーは此の考へを更に発展させて、数学的解説を与へ、物質粒子は物質波の群団であると考へ、之を波動力学の基礎觀念となし、波群の振幅に就いて所謂振幅方程式を導き出した。一方ボルン、ハイゼンベルヒ等は、物質波の本質が実際に空間中を伝播する波ではなくして、物質粒子の存在の確率を示すものであると説き、物質粒子を波動的のものと考へずして、そのまま粒子と考へ、振幅函数は粒子が空間内の斯く斯くの場所に存在して居るだらうと云ふ、存在確率を示すものであると主張した。此の存在確率は無限に多くの坐標を作るから、此等を二次的な表式に綜合して無限マトリクスとなし、此のマトリクスの算法によって、量子現象を論ずるのが、所謂マトリクス力学である。

此等の新学説は、旧式の理論と根本的に異なる所がある。即ち旧式理論に於いて一つの質点と看做されたものが、新学説に於いては波の群団と考へられ、旧式理論に於いて一つの数を以て表された事項が、新学説に於いては数の群団たるマトリクスを以て表されるのである。而して此の群団は実験の結果に準拠して、総べて統計的のものであるから、此の傾向は要するに従来の抽象的、独断的な決定が、具体的、統計的な実証に移ったことを示すものである。斯くて物理学的現象は、非連続的な諸要素の統計的計算によって代表せられることとなり、因果律はその本来の意味を失って、確率にその地位を護ったのである。因果律とは要するに、エネルギー活動の確率を概括的に表示する模型に過ぎない、と云ふことが知られるのである。云ふ迄もなく、確率はエネルギーそのものの性質に基因するのであるから、因果律、合法則性等も亦精神、物質と共に、エネルギーを根原とするもので

あって、万有同根の原理に漏れるものでないと云ふことは明かである。

時間、空間、因果律に就いては、なほ多々云ふべきことがある。此の三つを絶対的な、根原的なものと見ることは、既に述べた如く、機械学的宇宙観や唯物論の基礎をなすものである。而して我が古代思想も亦時間、空間の確立した観念の中に、発展したものであると述べる人もあるが、それは誤りである。第一に時間に就いての日本人の考へ方は、過去、現在、未来と三世に分って之を流動的に考へるのではなくして、山田孝雄氏の説かれた如く、中今の思想である。只今が時間の中心であると考へるのである。之を科学的に云へば、現在と云ふ瞬間か坐標系の原点になると云ふ意味である。而して此の思想こそは、近世物理学が劃期的の着眼点となす所なのである。此の思想の最も顕著なる表現は、国家社会に関する考へ方である。今上天皇は、^{あらひとかみ}現人神であらせられ、^{あきつみかみ}明津神であらせられ、国家の中心であると共に、その全体であらせられる。一切は今上天皇を中心として発顕し、還元し、今上天皇は過去の天皇と対立し給ふ御方でもなければ、過去の天皇によって制限を受け給ふ御方でもない。いはゆる天上天下唯我独尊、絶対万能、神聖の御方である。此の今上天皇中心主義は、中今思想の徹底したるものである。

空間に就いても、日本人の考へは之を静態的に、絶対的に見ないのである。科学の用語を以てすれば、三次元ユークリット空間が原始的に存在するものとは考へないのである。日本人の考へは、中心点が拡大して空間となり、時間となったものと解するのである。即ち動態に於いて、発展的に見るのである。故に其の中心は、初等幾何学的の中心にあらずして、微分幾何学的の中心である。之を積分すれば全体となる。中心即全体、全体即中心である。之を宇宙観に就いて云へば、天御中主神の^{みいっ}御稜威か宇宙万有となったのである。故に天御中主神即宇宙万有、宇宙万有即天御中主神である。之を国家観に就いて云へば、天皇の^{みいっ}御稜威が国家になったのである。故に天皇即国家、国家即天皇である。此の根本意識を会得しなければ、到底日本国体を解することは出来ないのである。

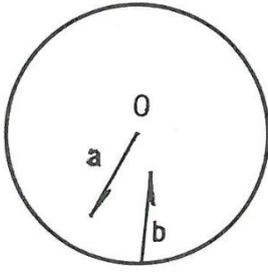
近世科学は此の日本的の時間、空間観に漸次接近しつつある。時空をエネルギーの場と

考へることが其の一つである。日本の思想に於いては、空間は中心点の拡大したるものであるから、当然球面でなければならぬ。而して拡大は御稜威^{みい}のことであって、御稜威は靈出づの義で、靈魂は発顕と還元との法則に従ひ、中心より発顕して又中心に還元し、此の発顕と還元との道程を空間と称し、時間と称するのである。近世物理学の宇宙観は、此の靈魂観の原理に限りなく接近し、宇宙の眞の姿はリーマンの空間であると云って居る。リーマン空間とは球面の空間である。而して此の空間に於いては、一直線は原点より出発して先へ進めば進む程、結局元の出発点に帰着する。即ち発顕、還元の法則に従ふ意である。光線は此直線に外ならぬのであって、其の行程が時間となり、空間となるのである。光は「靈翔^{ひかけ}」である。靈の発顕、還元的作用が時間となり、空間となるのである。古代日本人の大思想は、現代の第一線の科学が漸く接近することの出来た大真理である。深く之を研究すれば研究するほど、何人も驚歎するの外はないのである。

因果律に就いては、日本思想の深遠雄大なるに、更に驚歎すべきものがある。空間的事象を時間の函数として考へるやうな、浅薄皮相な観察は、日本思想の採らざる所である。現象継起の法則は、万有同根の原理に基いて、根源たる宇宙勢力そのものの中に求めねばならぬ。日本伝統の用語を以てすれば、万有の根原たる靈魂そのものに求めねばならぬ。これが即ち産靈^{むすび}の大法則であって、生魂^{いくむすび}、足魂^{たるむすび}、玉留魂^{たまつめむすび}、高魂^{たかみむすび}、神魂^{かみむすび}等、同じく魂の字を以て称せられる所以である。これが即ち靈魂観であって、その根本思想は、近世科学が漸く之に接近しつつあるものなることは、既に述べた如くである。此の偉大なる産靈の法則を以て因果律を照せば、恰も量子力学を以てニュートン力学を検するが如く、後者は複雑なる全機構の、僅に一局所を表すより以外の意味を持たないのである。

第二節 中心分派の原理

前項に述べた中心即全体、全体即中心と云ふことは、非常に重要な原理であるから、重ねて詳述しよう。



此処に図の如き円があるとする。此の円は多くの点の集合であって、それ等の中に中心点Oがある。さて此の円を始めから此の形で存在し、終りまで此の形を存続するものと見るのは、此の円を静物として死物として取扱ふことであって、宇宙間には斯かる死物は一つも

ないのであるから、此の見方は非科学的である。此の円を構成する無限に多くの点は何れも皆活物であるから、何れかの方向へ動くものでなければならぬ。更に詳言すれば、此の円は多く点の運動によって生成し、発展するものでなければならぬ。然らば、その運動は如何なる種類のものであるかと云ふに、此の円か円たる形を生成し、又此の形を以て発展するには、之を構成する諸点に、凡そ二つの運動方向がある。第一はaなる矢を以て示されたる如く、中心より発して、外部へ拡大する方向である。第二はbなる矢を以て示されたる如く、外部より発して中心へ収斂する方向である。若し此の円を構成する多くの点の中の一つでも、此の二つの方向以外の運動をなすならば、此の円は最早円として生成し、発展することは出来ないのである。

数学では、此のOを原点と称し、無限に多くの点が帰一すると云ふ意味から集積点と云ふ。此の円の平面上の一切の点は、bの如く中心に収斂すると見ることが、微分学の基礎観念であって、反対に中心よりaの如く展開したるものが、全体の形を造ると見ることが、積分学の基礎観念である。故に全体を微分することは、中心に還元することであり、中心をその発顕性に従って積分することは、全体を展開することである。

以上は、皇道の原理を科学の用語で表現したものに外ならぬ。aの方面を発顕と云ひ、bの方面を還元と云ふ。此の発顕と還元との二つの作用によって、一つの円が出来たのである。此の円を静態に於いて見れば、中心と分派との区別がある。即ちOは中心であって、その他の総べての点は分派である。然しながら之を動態に於いて見れば、多くの分派は中心より発顕したるものであって、又中心に還元するものである。故に中心と分派とは一つに帰する。之を中心分派帰一一体の原理と云ふのである。此の原理は宇宙万有同根一体の原理と共に、生成化育の根本に関する最重要の原理である。

以上の説明によって明かなる如く、中心即全体、全体即中心と云ふ原理の成立には、発
顕と還元と云ふ動的脈絡がなければならぬ。此の動的脈絡が、即ち産^{むすび}霊である。宇宙万有
は悉く発顕と還元との産霊によって生成し、発展するものである。此の産霊が皇道の最高
原理であって、又日本精神の基調をなすものである。皇道精神の世界無比なる特長は、宇
宣万有生成発展の動的脈絡を、その根本に於いて把握する所にあるのである。これ日本思
想が世界に冠絶する所以である。

中心即全体の原理を科学的に了解するにも、微積分の如き動的数学の基礎觀念を必要と
した如くに、宇宙の真理を了解し、その顕現たる日本国体、日本思想を了解するには、世
界の多くの思想に共通な、静的原理に比して遙に高級な、動的原理たる産霊を了解するこ
とが、絶対に必要である。これが解らないから、日本の学者と称する者の中にも、日本国
体に就いて、多くの誤解を懐き、或は天皇即国家の原理が、どうしても解らぬと公言する
やうな者が出るのである。此等の所謂学者を始め、低級なる外国思想を超出することの出
来ない多くの人々のために、以下更に日本思想の原理を詳述し、産霊の本義を説くことは、
実に重大なる意義を持つのである。日本思想は世界最高、万国に卓絶せるものである。近
世科学は漸くこれに接近して来たことを示して居るが、列国の宗教、哲学、倫理、道德等
は、科学の進歩に後ること遙に遠く、世界に横溢する多くの種類の思想は、最高絶対な
る日本思想を去ること遼遠なるものである。故に産霊の原理を説述することは、世界の未
来のために、人類の福祉のために、最重要の意義を有するのである。

宇宙万有の根本中心は、既に述べたる如く天御中主神である。天御中主神は物質でもな
ければ、精神でもない。何となれば、物質も精神も共に時間、空間、速度、質量、因果律
等の制約を受ける分派末梢の存在であるが、天御中主神は此等を超越する根本中心である
からである。これが即ち^{み(ひ)(ま)}霊である。霊の中の根本霊たる所謂元霊である。この霊の活
動が時間となり、空間となり、因果律となり、速度となり、質量となり、精神となり、物
質となり、宇宙万有となるのである。而して此の活動を産^{むすび}霊と名づけるのである。

自然科学の方法は、宇宙万有を客観的に研究することであるから、終局の根元を宇宙勢力に帰し、之をエネルギーと呼んで居る。エネルギーは靈を客観的に観察した名称である。而して之を主観的に観察すれば神である。エネルギーと神とは、靈を観察する両方面を代表する名称なのである。

さて、天御中主神の御靈は既に述べた如く、発顕と還元によって活動する。その発顕の働きを御稜威と云ふのであって、御稜威は靈出づの義である。此の発顕したる靈は、極小極微の靈子となり、千万億兆、無量無限の靈子が分散態に於いて存在し、これが物質となり、精神となり、万有を組成するのである。而して個々の靈子は、何れも皆同性同質のもので、それ自身が一体をなし、単一にして不可分のものである。之を生魂いくむすびと云ふのである。此の生魂は現象世界の根本要素で、之を科学的に云へば、エネルギー粒子である。而してその存在は時間、空間、質量等の現象の制約に従ふもので、その形は球形であり、極小の質量を持って居る。靈を「ま」と音表するのは、之を平面的に見れば円、立体的に見れば球の形を表したものである。素より此の生魂は極微なものであって、今日の理化学の機械にかかるやうな大きなものではない。何千万倍とか、何億倍とかにして、初めて顕微鏡で見えるとか、人間の五官に触れるとか云ふ風のものであるが、若し人間が之を見ることが出来たならば、荘嚴幽玄、優美麗妙、壮烈神秘、人間の想像などの出来ぬ造化の大奇観であらう。

生魂は右に述べた如く、それ自身に一体をなす単一不可分の粒子で、それ以上細分することの出来ないものである。此の粒子の集合が宇宙万有である。近世物理学は、実験と理論とのあらゆる方法を以て、此の生魂の性質を究明し、之にエネルギー粒子、作用量子、光量子等の名称を附して居る。これが即ち量子論である。而してその帰着点は、宇宙万有の根源が、それ自身生成発展の単位として、一体をなす単一不可分の、微粒子であると云ふ思想に到達したのであって、これは要するに我が民族の靈魂觀に限りなく接近し、生魂の性質を論証するものに外ならぬのである。

靈魂の魂は「たま」といひ「溜る」、「淳る」意味であって、此の粒子的性質を表すもの

である。之に対して霊は中心より発顕する行程と、中心に向って還元する行程との、二つの方向を有する不断の連続運動であるから、波動的性質を表すものである。光（^{ひかり} 霊翔る^{ひかけ}）なる語が、よく此の性質を表して居る。故に靈魂なるものは、宇宙根本勢力の波動的性質と、粒子的性質とを表すものであると云ふことが出来る。

此の波動的性質は^{たかみむすび}高皇産霊、^{かみむすび}神皇産霊と称せられる。高皇産霊は発顕の霊力を意味するもので、神皇産霊は還元の霊力を意味するものである。中心の霊力が発顕して、分派末梢に展開する作用が高皇産霊で、分派末梢が中心へ還元し、収斂する作用が神皇産霊である。而して此の二つの作用は、例へば交流の周波の如く、交互に来るのが常であるから、宇宙万有は波動的性質を有するのであって、波動の断面が粒子的性質になるのである。

宇宙万有は悉く波動的性質と、粒子的性質との両面を有するものである。宇宙の最も根本的なるもの、光に就いても此の二元的性質あることは、周知の事である。光量子説は光を粒子と看做す学説で、之によって光電効果、コンプトン効果等を満足に説明することが出来たが、光の干渉、^{かいせつ}廻折等の現象は、従来の波動説に依らねばならなかった。此の二元的の光の理論を統一しようとして、あらゆる努力が試みられたが、何れも不成功に終わった。そこで逆に此の二元的性質こそ本質的なもので、斯かる二元的性質が運動して居る物質粒子に就いても、起り得るものではないかと云ふ着想が、波動力学の基礎になった。かくして新量子論は靈魂觀の二つの方面、即ち霊の波動性と魂の粒子性とを、証明することに非常なる貢献をなしたるものである。

^{たかみむすび}高皇産霊、^{かみむすび}神皇産霊の二霊は、^{いくむすび}発顕と^{たるむすび}還元の^{たまつめ}波動の世界を表すもので、^{むすび}生魂、^{むすび}足魂、^{むすび}玉留魂の三魂は、^{むすび}粒子の世界を現すものである。而して波動の世界と粒子の世界とは、表裏一体をなすものである。此の関係を更に詳述しよう。

科学的に論ずれば、二霊の波動世界は微積分の行はれる連続集合の世界であり、三魂の粒子世界は代数計算の行はれる可附番集合の世界である。霊の連続的波動は、魂の粒子的集合となって現れる。之を足魂といふのである。霊の連続運動は、常にその収斂すべき極限がある。魂の粒子世界に於いては、此の極限は中心となって現れる。故に外見は単なる

中心であるが、その本質は極限值域は集積点であるから、収斂と展開との原点として、発顕と還元との本源として、中心たると同時に全体たる性質を有する。之を玉留魂といふのである。

生魂は粒子の性質を代表するもので、生成発展を現し、足魂は粒子集合を代表するもので、充実具足を現し、玉留魂は集合の中心と全体との関係を代表するもので、統一主宰を現す。生成発展と、充実具足と、統一主宰と、これ実に宇宙万有を一貫する三魂の法則である。更に此の法則を詳述すれば、中心根本たる天御中主神の分霊分魂が生魂である。生魂は^{みい}霊出づ、即ち発顕の作用によって生じたる霊の粒子である。此の発顕の作用が、即ち高皇産霊である。而して此の作用は恰も遠心力の如く、次第に中心より遠ざかって分散する方向に働くのである。然るにこれと共に、恰も求心力の如く、中心に近づけ、収斂する方向に働く還元の霊力がある。これが即ち神皇産霊である。此の作用あるがために、多くの生魂は同気相呼び、同魂相求め、一つの中心に収斂する集団を造る。之を集団として見れば足魂である。之を中心に収斂する全体として見れば玉留魂である。一切の物質的存在、一切の精神的現象は、此の三魂の顕現に外ならぬのであって、その詳細は多くの实例に就いて次第に説述されるであらう。

以上によって明かなる如く、三魂の法則は、発顕と還元との二霊の法則と表裏一体をなすものである。中心根本より発顕したる分派末梢は、又中心根本に還元する。此の発顕と還元との間断なき反復によって、中心と分派とは一に歸する。これ中心分派歸一一体の原理を生ずる所以である。さて此等の原理想法則が、現象世界に如何に顕現せられて居るか、次節に於いて更に説明することにしよう。

第三節 生成化育の態様

宇宙万有は、高皇産霊、神皇産霊の二霊と、生魂、足魂、玉留魂の三魂との顕現である。二霊の法則と三魂の法則とは、全宇宙を支配すると共に、又全体の部分たる万有個々を支

配する。何となれば宇宙は全体としても、又個々の万有としても、悉く靈魂の顯現であつて、二靈の法則と三魂の法則とは、靈魂それ自身の自性であるからである。万有を支配する法則は、その部分をも亦支配せねばならぬのである。

先づ物質界に於いて、最も根元的なるもの、即ち原子に就いて産靈の法則を会得することが出来る。既に述べた如く、現代物理学が原子に就いて知り得る所は、陽核が中心にあって、多くの陰電子がその周囲を廻転して居ると云ふことである。此の陽核が如何にして出来たか、陰電子が如何にして出来たかに就いては、物理学は何事も語らない。然しながら、靈魂觀の原理に於いて此の生成は明かである。即ち陽核は中心であつて、陰電子は分派である。此の分派は中心より発顯したるもので、又中心に還元しようとする。此の発顯の力と還元の力との均等する所に軌道を造つて、無限の廻転を続けるのである。故に二靈の法則より見れば、原子は発顯の波動的靈力と、還元の波動的靈力との所造しよぞうに外ならぬ。而して此の波動的靈力は、粒子的形態をとつて、中心の陽核となり、分派の陰電子となるのである。此等個々の粒子は皆生魂である。而して一つの原子を粒子の集合として見れば、これ足魂である。中心たる陽核が、全体を統制するものとして見れば、これ玉留魂である。

極細微小なる原子を生成した靈魂の法則は、巨大なる太陽系をも同様に生成したのである。太陽系は周知の如く、中心に大きな太陽があり、その周囲を水星、金星、地球、火星、木星、土星、天王星、海王星等の大遊星、火星と木星との間にある約一千の小遊星、数十個の衛星、幾百の彗星や多くの流星群等が、規則正しく廻転して居る。斯かる整然たる組織が如何にして出来たかに就いては、天文学上種々な学説があるのであるが、宇宙万有を一貫する靈魂の法則に歸着することは云ふ迄もない。多くの遊星や彗星は、中心たる太陽より発顯したるものであつて、又此の中心たる太陽に還元しようとする。その発顯と還元との二つの靈力の均合する所に軌道を造つて、無限の廻転を続けるのである。此の発顯と還元との波動的勢力と、太陽、諸遊星、諸彗星等の粒子的体系とは、不可分一体のものである。太陽を始め諸遊星彗星は一つ一つが活動の単位として、生魂の性質を具へ、此等が

太陽系たる集団を造って足魂を顕現し、中心たる太陽が全体を統制する体系によって、玉留魂を顕現する。三魂の法則は、如実に顕現せられて厘毫の遺漏もない。而して此の三魂法の粒子的体系は、二霊の波動的法則と不可分のものである。全太陽系の存在する時間空間は、太陽系そのものと不可分一体である。光や引力や電磁波の通過すると考へられるエーテル空間は、発顕の高皇産霊と還元の神皇産霊との二霊の顕現する所であって、三魂の粒子的存在たる太陽系そのものと不可分一体なのである。故に殊更に引力などと云ふ仮定を設くる必要はない。時間空間そのものが霊であって、発顕の霊力と還元の霊力との構成であるから、これが粒子世界に顕現するときには、体系も軌道も時間空間そのものの性質の中に定まって居るのである。近世の相対性理論は、この点を究明して、引力は四次元のリーマン空間そのものの性質であると主張するに至った。靈魂観の一例証と看做すべきであらう。

微小なる原子も、巨大なる太陽系も、等しく二霊三魂の法則に従ふのであるから、その中間の物質的諸現象が、之に従ふことは勿論であるが、此等の中で特に細説する必要を見るのは有機物である。

有機物は生命の宿る所であると考へられて居る。然しながら生命の宿る所は、有機物ばかりではない。一切の無機物にも、時間空間そのものにも、皆生命が宿って居るのである。何となれば、此等は悉く靈魂の発顕する態様であり、靈魂即生命であるからである。有機物も亦素より二霊三魂によって出来て居るのである。二霊三魂が即ち生命と呼ばれるものなのである。

植物でも動物でも、一切の生物体は、細胞によって組成せられて居ると云ふことは、顕微鏡の発明後、間もなく発見せられた事であるが、総べての生物体が斯くの如く細胞なる単位粒子に還元せられ、細胞はそれ自身で一個体をなし、それ以上の細分を許さないものであると云ふことは、一切の物質が電子、陽粒子等の単位粒子に還元せられ、此の単位粒子は、それ自身が一つの素量であって、それ以上の細分を許さないと云ふことと同様に、

三魂の法則の基礎を実証するものである。一つの細胞は、それ自身が一個体をなす生命の単位粒子であって、生魂である。バクテリア、原生動物の如き、単細胞生物では、一つの細胞が一つの生物体であるが、その外の多くの動植物では、多数の細胞が集団を造って足魂を顕現する。而してその集団には、中心分派の原理が如実に働くのである。例へば高等植物に於いては、根幹と枝葉との体制整然として、中心分派根本末梢、帰一体の原理を表現し、高等動物に於いても駆幹、四肢、諸内臓等の分派が中心たる脳髓によって主宰せられ、一切の活動は神経系統によって、中心より発顕して、又中心に還元し、個体の各部分とその活動とは、完全に統一せられて居る。これ即ち玉留魂である。勿論発生史の或る時期に於いては、此等の分化が判然しないものがあるが、例へば粘菌のプラズモヂウムの如きは多核の原形質塊をなし、生魂と足魂との分化が明瞭でなく、又下等動植物の中には、統一主宰の作用が未だ発達せず、足魂と玉留魂との分化が判然しないものがあるが、此等は何れも発生の過渡期を示すものに外ならぬのである。

斯く通観すれば、生物の個体そのものは、三魂の法則の現実の証明に外ならぬのであるが、一つの細胞それ自身も亦三魂によって生成することを示すのである。一つの細胞は幾千億万の物質原子によって、構成せられて居るのであるが、原子を単位とすれば、一つの細胞は幾億の原子の集団たる足魂である。此の足魂は中心と分派との区別が整然として居る。即ち細胞は通常その外圍を細胞膜で蔽はれ、その中に細胞質があり、その中心に核がある。此の核は一つの細胞を統一主宰する中心体であって、遺伝、分裂等の主要なる作用は総べて核によって行はれる。一つの細胞は中心体たる核によって統一せられる。これが玉留魂なのである。

一つの原子の組成に於いては、電子が生魂であって、原子は足魂であり、玉留魂であったが、一つの細胞の組成に於いては、その原子が生魂であって、細胞は足魂であり、玉留魂である。而して一つの個体の組成に於いては、その細胞が生魂であって、個体は足魂であり、玉留魂である。更に国家社会の組成に於いては、此の個体が生魂となって、生成発展の単位になるのである。斯くの如く、三魂の作用は小なる階段より大なる階段へ、同一

の法則を一貫しつつ、次第に発展して行くので、之を三魂発展法と云ふ。

さて以上は生命現象の形態上の側面観であるが、更に進んで生命現象の本質が如何なるものであるかを究むれば、畢竟二霊の波動的作用に外ならぬことを知るのである。発顕と還元との波動的霊力が生命の本質であって、発顕の作用と還元的作用との合致する所に粒子の形態を生じ、三魂の体系を造り、細胞となり、個体となるのである。此の二霊の作用は細胞原形質の二元的性質となって現れる。

細胞原形質を化学分析すると、最も大なる部分を占めて居るのは水であって、その次は蛋白質である。原形質の物理化学的性質は、蛋白質溶液のそれと、極めて類似した点が多いから、蛋白質は細胞原形質の主要物質であると云ふ。それで唯物論者等の中には、生命即蛋白質と解する者がある。例へばエンゲルスは『反デューリング論』の中に、生命とは蛋白質の存在態様であると云ふことを主張して居る。何故に蛋白質の存在態様が生命であるかと問へば、多くを答へない。ただ生命を蛋白質なる物質に帰することを以て、窮極的解釈と心得て居るやうである。弁証法的唯物論等と称するものの多くは、その認識論に於いても、自然科学、社会科学上の見解に於いても、此の程度の不徹底なるものであって、多くの誤謬、錯覚がこれより生ずるのである。

蛋白質は加水分解によって生ずるアミノ酸が、構成要素と考へられて居るが、アミノ酸はアミノ基とカルボキシル基とを有する化合物で、アミノ基は塩基としての原子群で、カルボキシル基は酸としての原子群である。従って蛋白質は酸の性質と塩基の性質とを併有する両性体で、アミノ基がカルボキシル基より多ければ塩基性強く、反対の場合は酸性となる。アミノ基とカルボキシル基とは、種々の比率で種々の状態に結合し、生物界に存在する莫大なる種類の蛋白質は、斯くして生じたものである。細胞核の構成も亦勿論此の例に漏れないので、核の主成分は核酸と称する酸性物質で、それが塩基性蛋白質、例へばプロタミン、ヒストン等と結合して両性体を造って居る。

生命現象は此の酸と塩基との相関比率の変化する所に生ずるものである。此の比率の変化は、細胞内の水素イオン濃度となって現れる。両性体が酸としても塩基としても、作用

しない場合には、解離したイオン濃度が最少であって、此の点に於いては発芽、成長等の生理作用も亦最少である。これより水素イオンの量が降下或は上昇するに従って、酸性或は塩基性となる。一般に此のイオン濃度は安定であって、外界の条件によって変化を受けることは少いが、アメーバの運動、植物の屈曲運動、気孔の開閉、動物植物の細胞の分裂、受精などの際には、此等の生理作用に応じて此の濃度が変化し、又細胞が傷害を受けたり、病的になったりした場合にも変化する。此の変化と均合とが、実に生理作用の本質なのである。

一般に原形質は不一樣なものであって、基礎的な単位生活現象の行はれる場である。且つそれは両性を顕現する二つの力によって、絶えず活動して居るものであって、静的ではなく、動的の概念である。従って性質の上から、原形質とはこんなものだと云ふ定義は与へられない。原形質は生活現象の原因ではなくして、反対にその結果である。蛋白質が生命なのではなくして、生命の結果として外的に表象せられたものである。顕微鏡の下に生命を覗き、試験管の中に生命を発見しようと努力しても、それは無駄である。生命の本質は発顕の靈力と還元の靈力とに歸すべきである。此の二つの靈力は酸と塩基との化学的エネルギーとなって顕現せられ、両エネルギーが互に活動し、均合する所に生命物質を生ずるのである。此の生命物質が三魂の法則に従って発展することは、既に述べた通りである。而して三魂の発展は二靈の波動的作用と、表裏一体にあるものである。換言すれば発顕の化学的エネルギーと、還元の化学的エネルギーとの往還均合することが生命の本質であって、此の二靈の作用が、物質粒子の形態を以て現れるのが細胞である。故に物質の形で生命を発見し、生命を或る種の物質に帰せんと試むるが如きは、全く本末顛倒の愚挙である。

宇宙万有を生成発展する二靈と三魂とが、同じく有機物を生成し、発展し、生命の本質をなすと云ふことは、以上によって略々了解されたであらう。

生物の特色は、細胞を以て生成発展の単位たる生魂となすことで、これは無生物が原子を以て生魂となすのに対応する。而してその発顕、還元的作用は無機界との間に行はれる。即ち無機界より発顕して、又無機界に還元するのである。これ有機界が副生界と称せられ

る所以である。

斯くて我等は三魂発展法の三つの段階を知った。即ち第一段は電子、作用量子、光量子等のエネルギー粒子を生魂となす発展であって、これはエネルギー界と名づくべきである。第二段は原子を生魂となす発展であって、所謂原生界である。而して第三段は細胞を生魂となす発展であって、所謂副生界である。而して三魂の発展は之を以て終止せず、更に第四段の発展がある。それは細胞の集合統一体たる個体を生魂となす発展であって、これが即ち国家社会である。

人類は之を細胞の集合統一体として見るときは玉留魂であるが、社会集団の生成発展の単位として見るときは生魂である。この生魂は同気相呼び、同類相求めて、足るが上にも足らんことを望み、満つるが上にも満つることを欲して集団を造り、足魂を顕現する。これが即ち社会である。而して此の足魂は当然に中心と分派との構成を有し、統一主宰の作用を伴ふのである。分派は中心より展開して又中心に収斂し、中心は中心たると同時に全体たる性質を持つ。即ち玉留魂たることが、宇宙必然の法則である。斯く全体が統一せられることによって、社命が国家になるのであるが、国家の中心が中心であると共に、全体であると云ふ為めには、平面的に中心であるのみならず、立体的に根本であり、中心根本と分派末梢とは、帰一一体の関係にあるものでなければならぬ。斯かる中心が即ち我が天皇の御本質である。故に天皇即国家、国家即天皇と申すので、中心即全体、全体即中心と云ふ宇宙根本原理の人生社会に顕現したるものに外ならぬのである。

外国には斯かる完全なる中心がないから、法を以て中心とし、徳を以て中心とし、或は武力、権力、財力等の力を以て中心とする。此等は皆人為の工作物である。宇宙自然の法則に従ふものではない。故にその中心は中心分派帰一一体にあらずして、中心分派對立争闘であり、根本末梢帰一一体にあらずして、根本末梢分裂混乱である。正確に云へば、中心にあらずして対立の一側面であり、分裂の一局部である。故に斯かる国々以外のことを知らない人々が、人間の歴史は階級闘争の歴史であるなどと云ふのは、強ち無理ではない。

力を以て圧迫する一群と、圧迫される一群との対立を本質とする集団ならば、歴史は階級闘争の歴史に相違あるまい。斯かる国家は、正しき意味に於いて、国家と云ふことは出来ないで、三魂の靈力が未だ正当に発展せず、玉留魂が未だ完成しない過渡期にあるもの、或は生成発展の正路を逸脱して、退化の現象を呈するものである。恰もプラズモチウムが未だ細胞を造らずして、多核の原形質塊をなし、多核細胞が多くの中心を有するが如き例外であって、エネルギー界、原生界には斯かる例外は殆ど無いが、事象が複雑になるに従って副生界には多くの例外があり、更に複雑な国家社会に於いては、例外が原則より多い様な場合もある。然しながら、宇宙と共に永遠の存続発展性を有するものは、常に原則に準拠するものでなければならぬことは云ふ迄もない。

世界の多くの国家は、単なる人間の集合として、社会と云ふことは出来ても、正しき意味に於いては国家と云ふことの出来ないものである。真の国家はただ日本天皇国あるのみである。法を以て中心とし、徳を以て中心とし、或は武力、権力、財力等を以て中心としても、総べて人為の工作物で、対立分裂の所産に過ぎないものであるから、斯かる中心は常に動揺し、一つの中心は容易に他の中心によって代へられる。これが即ち革命であって、幾度革命を繰り返しても、分裂対立の連続で落ちつく処がない。所謂永久革命で、争闘と混乱との中に人類全体の疲弊衰亡を招く外はないのである。斯く中心と分派とが対立して居るから、君主国と民主国とは対立的な観念になる。此の両者が帰一一体になって、宇宙の真理を実現するのが、天皇国なのである。全体を構成する各单位が中心より展開して、又中心に収斂すると云ふ性質を持たないから、各々勝手な方向に進まうとする。これが即ち個人主義であり、自由主義である。此等は要するに全体の分裂解体の外ならぬのである。

三魂の作用が正常に発展して、宇宙の真理を如実に人生社会に顕現するものが、日本国である。故に日本国は絶対の存在であって、その発展は無限である。家族が発展して部落となり、部落が発展して国家となったやうに、此の集団的發展は必ず世界人類を一丸とする大集団にまで発展する。これ三魂発展法の当然の要求である。而して来るべき世界国家は、ただ天皇国としてのみ実現せらるべきことは、多くの説明を要せずして明かであらう。

以上は三魂発展法によって国家社会を説明したのであるが、此の三魂の作用は、二霊の法則と表裏一体の関係にあるものである。故に二霊の法則が、如何に国家社会に働くものであるか、次にこれを説明しよう。

人類は之を個人的に見るときは、出生によって自然界より発顕し、死亡によって自然界に還元する。故に出生と死亡とは、自然と人生との発顕還元の契機をなすものであるが、此の発顕還元の作用は、個人的に行はるるにあらずして、集団的に行はるることをその本質とするのである。男女が夫婦となり、親となって子孫を設けると云ふことは、人類の団体を造る根本である。これによって血縁が出来る。此の血縁が次第に発展して、団体が組織されるのであるから、団体の根本中心は云ふ迄もなく親であって、親が全体を統一主宰するのである。親は中心であると共に、全体であると云ふ性質を、物質的にも精神的にも具有するものであるが、個人としての親は出生と死亡とに制約されるものであるから、団体が団体たるために必須な中心即全体の性質が、血縁集団の根本要素たる血統によって継承せられるのである。これが即ち血統統制である。これによって団体の中心が確立するのである。中心即全体の原理は、始めは物質的事実であったものが、団体の発展と共に、後には精神的な制約に変わる。物質的なものが精神的なものに発展する一事例であるが、反対に精神的なものが物質的なものに発展する事例も多々あって、精神と物質とは第一節に詳述した如く同根一体であるから、これによって本質を変ずるものではない。親心が親に代って、中心即全体の作用を全うするのである。これと共に分派末梢は、子心となって中心に還元収斂する。親心の発顕と子心の還元とが、絶対的団体の心理的要素である。

中心分派の関係が、斯く物質的なものから精神的なものへ発展するが如く、団体の構成も血縁上の結合から経済的の結合に移る。近世の国家は何れも人と人との経済的結合を、その成立要素となすものであるが、此の場合にも中心即全体の作用によって統制せられれば、団体が団体として安定しないことは勿論である。

個人の生産労働と消費生活とは、総べて協業、分業、交換、分配等の団体的組織の下に於いて行はれる。此の組織は団体の中心より分派へ発顕する作用と、分派より中心へ還元

する作用との二靈法に従って行はれることが、団体が統一体たるために必須の要件である。発顕の作用は中心より全体に向ふ政策、制度の形態に於いて行はれ、還元的作用は全体より中心に向ふ服従、勤勞の形態に於いて行はれる。政策、制度と服従、勤勞との渋滞なく、偏頗なき発顕と還元の中に、国家団体が無辺無限の進歩発展をなすことが、宇宙万有を蔽ふ二靈の根本正道である。

此の制度政策は、云ふ迄もなく親心を基調とするものでなければならぬ。これが即ち皇道政治である。既に述べた如く、国家社会は人の集団である。人が生魂である。親心は人と人との関係である。然るに若し人を従とし、他の何物かを主とする制度政策がありとすれば、それは根本的の誤りである。物質を主として、人を之に従属せしめんとする資本主義と、産業を主として、その産業の主たる人を之に従属せしめんとする共産主義とは、此の意味に於いて根本的の誤りである。皇道政治とは断じて相容れざるものである。

我が皇道国家に於いては、天皇は万民の大御親として、万民にその処を得しめ、之を生成発展せしめんことを念じ給ふ。此の大御心を輔弼し奉って政策制度に具体化し、皇道政治、皇道経済を実現することが、その局にある重臣の責務である。

明治天皇が明治元年三月十四日の御宸翰に、

天下億兆、一人も其処を得ざる時は、皆朕が罪なれば、今日の事、朕自身骨を勞し、心志を苦しめ、艱難の先に立ち、古列祖の尽させ給ひし^{あと}蹤を履み、治蹟を勤めてこそ、始めて天職を奉じて、億兆の君たる所に背かざるべし。

と仰せられたのは、大御親心の御発露として、皇道政治の大本を御示し遊ばされた絶対尊嚴の御聖旨である。宇宙と一体なる皇道の御実現である。

斯く皇道政治が不断に根本中心たる天皇より発顕すると共に、全国民の服従勤勞となり、経済上、軍事上の實力は悉く根本中心たる天皇に還元する。此の発顕と還元とが、絶対国家日本の進歩発展の動因である。

第四節 生成化育の本源

前三節に於いて詳説したる如く、宇宙万有は二霊と三魂とによって生成し、発展する。互に空間となり、時間となり、物質となり、精神となり、原因となり、結果となる。ただに外界の事物のみならず、人間の精神作用も亦之によって生ずるのであって、感覚、感情、理論、思想等、皆三魂二霊の働きである。故に三魂二霊の産霊の法則は、宇宙の絶対理法であり、人間精神作用の根本原則である。一切の自然科学、一切の精神科学は、最高原理を此処に求めねばならない。一切の宗教、哲学、科学、政治経済、倫理道徳は、悉く此の最高境地に於いて融合統一せられるのである。

三魂は粒子的勢力であって、中心本体より分派分泌する分体である。二霊は中心本体と分派分体とを往還する波動的勢力である。而して三魂と二霊とが、表裏一体の関係にあることは、既に詳説した通りである。三魂二霊は悉く中心本体より出でて、又中心本体に帰るものである。此の中心本体を天御中主神と申すのである。

天御中主神は宇宙の根本中心であると共に、又その全体である。天御中主神即宇宙万有、宇宙万有即天御中主神である。その根本と云ふのは、宇宙進化史のどの時機が根本であると云ふのではない。その中心と云ふのは、天文学者の考へて居る、或る空間の何処に中心があると云ふのではない。天御中主神の御稜威が時間となり、空間となるのである。天御中主神は時間空間を超越して、此等の根源たるものであるから、之を宇宙の根本中心と云ふのである。

人間の認識思考は、悉く二霊三魂の所産であるから、必然的に時間、空間、因果律等の制約を受ける。従って二霊三魂の根源であって、時間、空間、因果律等を超越する、中心本体を認識することは出来ぬ。しかも此の中心本体は、宇宙万有として顕現し、全体と部分との普遍的法則によって、その存在態様を証明するのである。その存在態様とは、即ち宇宙万有同根一体の原理と、中心分派帰一体の原理とである。此の二つの原理は宇宙万有のあらゆる構成に於いて、大小如何なる部分に於いても実現せられ、宇宙全体が同一の

根本中心より発顕して、又同一の根本中心に還元することを、終局的に証明するのである。靈魂活動の法則と、其の中心本体とは、人間のあらゆる思考、あらゆる理論が限りなく、之に到達せんとする極限境である。相対的思考、相対的理論を以てしては、如何にしても此の絶対的真理に到達することは出来ぬ。ただ思考と理論との限り無き発展によって、此の絶対的真理に限り無く接近することを知るのである。これ思考、理論そのものが靈魂の顕現であって、根本中心に収斂還元せんとする作用を表示するものに外ならぬからである。ただ実行体験の世界に於いて、此の絶対的真理は端的に直観せられる。何となれば、実行体験は部分即全体の法則に従ふもので、常に絶対性を具有するからである。これ靈魂觀の了得が、觀察思考の半面に、常に実行体験を必要とする所以である。

宇宙万有は悉く天御中主神より出づるものであるから皆神である。世界のあらゆる人類邦土生産は、悉く天御中主神の分靈、分魂、分体神である。此の意味に於いて、祖神は山の神を生み、川の神を生み、海の神を生み、植物の神を生み、動物の神を生み、風雨雷電、雲烟氣流の神を生み、世界人類悉く神として生れ出でたのである。人間的生活上より之を区別して、鉱物と云ひ、植物と云ひ、動物と云ひ、或は異邦人と云ひ、野蛮人と云ふことは、固より差支はないが、之を輕蔑したり、虐待したりすることは、民族信仰の許さない所である。天御中主神の御心より云へば、同工異曲であって、各自相互に其の自性を發揮し、自我を顕しつつあるのである。相互に相寄り相集りて、各自の生活をなすと共に、各自相互に調和統一して、相互に各自の生活を扶助しつつあるのである。我に主観あり、自性を認め、自我を認むるが如く、彼等も亦それ相応の主観あり、相互に自性を認め、自我を顕しつつあるのである。彼等はそれ相応なる思ひやりをなして、彼等の勞を慰籍せねばならぬ。相対的同情の念を互に払ふのは、独り人間と人間との交際のみではない。動物、植物、鉱物、天地万有に対しても、相愛の念を發すると同時に、其の勞を謝する所なくてはならない筈である。吾と我が身の自性に省みよ。斯くしてこそ、其の自性の満足するものではないか。表面こそ千様万態であるが、其の裏面は同根一体であって、等しくこれ神である。人生生活は独り人間のみの生活として已むべきものでない。動物生活、植物生活、

鉱物生活、天地万有の生活と調和統一して、始めて人生生活を全うし得るのである。なほ進んでは此等の根本たる産霊神としての生活状態に達せんとするのが、我が祖神の垂示せられた皇道精神である。

斯かる同根一体の万有は、産霊の活動によって生成し、発展するのである。高皇産霊、神皇産霊は中心より発顕して分派となり、分派より還元して中心に帰する波動的霊力である。これが即ち光であり、精神である。宇宙万有は此の二霊によって出来たのであるから、悉く精坤がある。人間や高等動物だけに精神があると思ふのは、非常な誤りである。此の二霊の活動は、生魂、足魂、玉留魂の三魂の顕現と、表裏一体の関係にある。三魂は粒子的存在であって、質あり、量あり、実体がある。これが発展して原子となり、細胞となり、個体となり、社会となり、宇宙万有となる。その組織は常に中心と分派、根本と末梢との体制を有し、小は原子、細胞より、大は天体地球の構成に至るまで、簡単なる原生界より、複雑なる人間社会に至るまで、宇宙万有を一貫する三魂の法則となる。而して三魂は二霊と表裏一体の関係にあるのであるから、分派末梢は中心根本より発顕して、又中心根本に還元し、中心の本体と輪廓の分体とは、同一霊力の流行であるのみならず、分体相互も、本体に即しては帰一一体となる。これ即ち中心分派帰一一体の原理である。中心即全体の原理である。

此の宇宙自然の組織、活動、発展、其のままの原理原則が、人生社会に顕現したのが、我が皇国の国体である。即ち天皇は天津日の御延長、民は天皇の分身、国は皇家の延長である。故に、天皇即国家、国家即天皇、不二一体である。

天皇の御本質は全国家、全国民生成化育の御本源にましますことである。天皇の大御心は宇宙万有を生成化育する産霊の大精神である。明治天皇が、「天下億兆、一人も其処を得ざる時は、皆朕が罪なれば、」云々と仰せられたのは、此の大精神の御発露に外ならぬのである。産霊の絶対理法を知らずして、日本国体を解することは出来ない。産霊の大精神を知らずして、天皇の大御心を察し奉ることは出来ない。外国思想の外に多くを知らない今

日の学者、思想家等が日本国体を論じ、天皇の御本質を論じて、概ね誤解に陥り、謬論に墮するのは、深玄絶対なる産霊の原理を解しないからである。産霊の根本原理を解せずして、日本国体を論ずるのは、恰も数理を知らずして天文を論ずるが如く、生理解剖を知らずして医学を説くが如く、危険甚だしきものである。

既に述べたる如く、日本民族の中心思想は、今上天皇を絶対の中心と仰ぎ奉ることである。今上天皇は天御中主神と御一体であらせられ、天照大御神と御一体であらせられ、至上至聖絶対無制限に在します。これ民族精神の確信する所で、又歴史上の事実である。天皇は一切の制度政策の御本源にましますが故に、旧制度を御継承遊ばすのも、又は之を変更して新制度を御制定遊ばすのも、総べてその御意のままである。此の点に於いて、今上天皇は過去の天皇と対立し給ふものでもなければ、過去の天皇によって制限を受け給ふものでもない。ここに日本国体の万国に卓絶せる特長があるのである。若し天皇が過去の制度によって制限を受け給ふものならば、時代の進歩が制度に適しないやうになると、国家が旧制度と共に亡びることになる。これ生成発展の産霊の精神に基く日本国家と断じて相容れない思想である。

神武天皇てんと奠都の大詔に、

夫大人立ひじり制のり。義必随ことわり時。苟有いやしくも利あらば民くほさ。何妨たみに聖造なんぞ - (日本書紀)

明治天皇明治元年三月十四日の御誓文に、

一、旧来の陋習を破り天地の公道に基くべし。

と仰せられたのは、皆此の大義を述べられたのである。国運の進歩に応じ、国情の変遷に適して、制度も亦何等の渋滞なく、自在に屈伸する所に生成化育の妙所がある。これが為めに日本国家は天壤無窮なのである。天皇は生成化育の御本源として、全国民の大御親として、その大御心が間断なく制度政策となって発顕すると共に、全国民の勤勉努力、国家の実力は悉く天皇に還元する此の発顕と還元との間断なき往復の間に、日本国家が無辺無限の進歩発展をなすのである。

(次 第六章 大嘗祭論 へ)